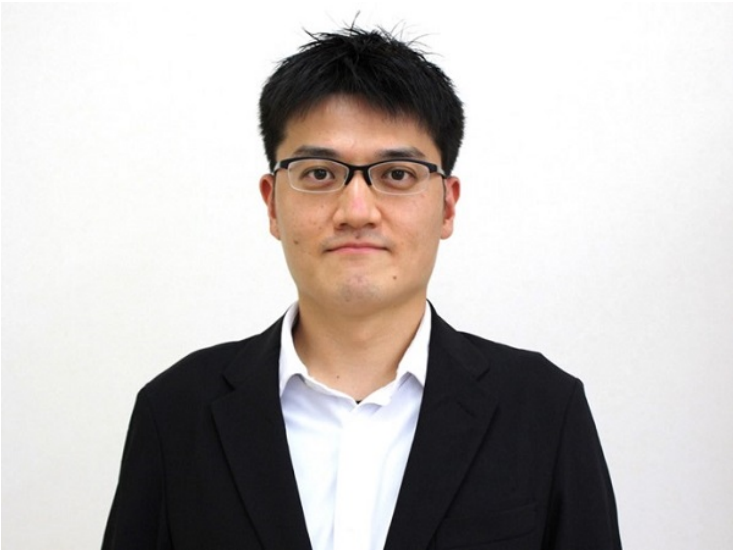
【福井】ゲストハウスを拠点に地域活動「将来はユニークな公立診療所をつくりたい」-新野保路・今庄診療所医師に聞く◆Vol.2

2023年5月5日 (金)配信 m3.com地域版

「病気だけでなく人を診る大切さを早く感じてほしかった」――。「今庄診療所」（南越前町）に勤務する新野保路医師は、ゲストハウスを拠点として医学生や研修医に地域交流を促す理由をこう話す。新型コロナ禍で活動は進みづらかったが、2022年から徐々に町に出て行けるように。「まだまだ有志の活動レベル」と今後の成長を望むその先には、地域医療を存続させるため、「地域に溶け込むような、ユニークな公立診療所をつくりたい」夢がある。（2023年4月11日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



新野保路氏（本人提供）

――新野先生は学生時代から定期的に今庄地区に足を運び、2020年に今庄診療所に着任してからは診療だけでなく地域に向けた活動も始めます。

医師としての地域活動は初期研修医のころから行っていました。歴史ある町並みの保全に取り組むNPO法人「今庄旅籠塾」の活動に参加して熱中症をテーマに住民にお話ししたり、地域の集会所や花農家、祭りの場で健康教室を開いたり。自分なりにいろいろと活動してきたつもりでしたが、こういった場で耳を傾けてくれる人の多くは健康に関心のある人たちでした。「もっと広く多くの人に情報を届け、健康に関心を持ってもらうにはどうすればいいんだろう……」。

後期研修を終えてからすぐに今庄診療所に着任した背景（詳細はVol.1を参照）には、こんな課題を打開したい思いもありました。「自分の拠点を設け、そこで本格的に地域活動を進める」という意図もあったのです。

――活動内容には、町に屋台を出したり、ゲストハウスを拠点に先生の母校である福井大学の医学生や研修医の地域交流を促したりするものがあります。

どちらも今庄診療所に着任した2020年4月に始めました。町に屋台を出して住民と交流する活動は、先輩医師の取り組みを参考にしました。2016年に家庭医の孫大輔先生らが東京都の谷根千地域で始めた「モバイル屋台de健康カフェ」や、守本陽一先生が兵庫県豊岡市で展開してきた「YATAI CAFE（モバイル屋台de健康カフェin豊岡）」です。今庄地区で始める前には豊岡市に行き、YATAI CAFEの様子を見学させてもらいました。

もう一つの活動は、「暮らしつなげるまちづくり診療所プロジェクト」と題し、今庄地区でゲストハウス「地域まるっと体感塾 玉村屋」を運営する中谷翔さんらと協力して行っています。玉村屋では、農家への訪問や日本酒の仕込みなど住民の暮らしを体験するプランを提供しており、私が進めたい地域活動と親和性がありました。中谷さんとは

学生時代から今庄地区を訪れていた縁で2015年ごろに出会い、「一緒に何かやりたいね」と以前から話していました。

新野氏（右下）が中谷氏（左上）ら地域の人と作った屋台の下地（本人提供）

――活動を始めた2020年4月は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第1波の期間に当たります。

これは痛かったですね……。対外的な活動を進めづらくなったので、オンラインで住民に今庄地区の暮らしを医学生や研修医に話してもらったり、「オンライン宿泊」をしてもらったりしました。オンライン宿泊というのは、今庄駅や玉村屋、町並みなどの写真をデバイスの画面に出しながら地域を追体験してもらい、夕食時は前もって参加者に送った名産品などをおのおのがいる場所で食べ、感想を言い合う、といったものです。屋台の出店も今庄駅前で行いましたが、感染症の流行によって定期的には行えませんでした。

――同プロジェクトでは医学生や研修医に焦点を当てていますね。

診察室で接する患者さんの背後にあるもの、患者さんそれぞれに生活や人生があり、多様な価値観の中で生きていることを早く肌で感じてもらいたい思いがあります。私自身、学生時代に人間関係がとても狭くなってしまったことを反省していて。自分の家族や親族以外に高齢の人と話す機会があまりない人は多いと思うので、病気ではなく人を診ようとする魅力を感じてもらいたいなと。

――COVID-19の感染が少し落ち着いてきた感があります。活動にも変化はありますか。

プロジェクトの方は2022年から徐々に対外的にも行えるようになりました。医学生と研修医が地域に出て、住民に日々の暮らしについてインタビューしたり、肉屋の仕込みやパン屋の袋詰めなどの仕事を体験させてもらったりしました。今庄地区に移住してきた人のご自宅に行き、雪の対策にとDIYを手伝ったほか、一緒に食事を作ったことも。2022年12月までに14人の医学生と研修医が参加し、11人の住民に取材させてもらいました。

このプロジェクトは自治社会の推進に向けた活動を対象とする公益財団法人トヨタ財団の助成を受けており、助成金を活用してホームページや書籍の作成も進めています。私たちの活動内容や住民への取材の模様などをテキストや動画の形で発信していく予定です。

――「地域外の若者に自分の話をする」のは住民にも新鮮なことかもしれませんね。

そうですね。住民からすると自分の普段の仕事や生活はごく自然なもの。それを興味を持って聞かれることは刺激的だったようです。最初は恥ずかしがっていたものの、時間がたつにつれて饒舌に語ってくれる人もいました。若者に認められたことで「元気をもらえたよ」と喜んでくれる人もいました。

医学生や研修医には、フラットなコミュニケーションの大切さや難しさを感じてもらえたようです。アンケート結果によると、難しかった点に「コミュニケーション」を挙げる人が多く、世代間ギャップなどのためなかなか話が続かない人も見られました。家庭医療において雑談はとても重要で、患者さんの日々の生活の話から病気の原因が浮かんでくることもあります。コミュニケーションを通じて人を知っていく面白さや奥深さの一端でも体感してもらえたのならうれしいです。

――最後に、今後の展望をお聞かせください。

地域活動と医師教育の双方を充実させていきたいです。地域活動の面では、感染症流行によってできなかった玉村屋での宿泊型プログラムも行い、屋台については院内に設置し、住民が作った作品や撮影した写真などをそこに展示する文化祭的な活用を検討しています。医師教育の面で今庄診療所は既に福井大学の連携施設ですが、今後はより多くの大学・病院から医学生・医師が集まるようにしたいです。福井に家庭医療を広げることを目標に、地域活動と絡めて教育も担っていければ。

そして、将来的には、地域に溶け込むようなユニークな公立診療所をつくっていきたい思いがあります。地方の人口構成と同様、公立診療所も担い手の高齢化が全国的に進んでいます。南越前町には当院を含めて二つの公立診療所と四つの民間クリニックがありますが、私以外の医師は皆60歳以上。地域医療を存続させていくためにも、医療者が働きたくなる「ユニークで楽しい診療所」を、地域のインフラとして重要な公立機関で実現できないかと。

イメージはこのようなものです。ワークライフバランスが整っており、メンバー個々が自身の強みを発揮できる。医療者の教育を担い、地域にも積極的に出ていく。住民からすると、外観や空間デザインが配慮されており、「病院っぽくない」入りやすい雰囲気で、カフェや図書館、ジムなどがあり、受診以外の「地域の居場所」として利用できる――。まだ明確ではありませんが、医療者が楽しく働けて、住民が相談しやすい、そんな診療所づくりも視野に活動を進めていきたいですね。

◆新野 保路（しんの・やすみち）氏

2015年福井大学医学部卒。後期研修修了後の2020年、今庄診療所に着任。外来・病棟・在宅医療を担いながら、地域活動も推進する。日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索